第6章

ディスカッション活動・事後活動セッション

1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

（1）目的

ディスカッション活動は、各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、集団の中での意見のやり取りをする能力の向上及び人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

（2）テーマ

本年度のディスカッション活動テーマは、「日本ASEAN友好協力50周年を迎えた新たな協力の時代に、青年ができること」とし、SDGsを内容とした５つのグループ・テーマを設けた。PYは、ASEAN各国からPY２名及び、日本からPY４名で構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

a. グループ・テーマ

① 質の高い教育
② ジェンダー平等、女性活躍の推進
③ 経済成長と住み続けられるまちづくり
④ エネルギー、気候変動対策、循環型社会
⑤ 健康とウェルビーイング

（3）実施方法

a. ディスカッション活動

プログラム開始前に、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

２回のオンライン交流では、グループ内でのアイスブレイクやルール設定を皮切りに、ファシリテーターが主導しディスカッションを実施した。実際に対面する前にオンラインでディスカッション活動を行うことによって、日本国内活動でのディスカッションに向けて必要な準備を行った。

日本国内活動ではディスカッション活動の一環として、グループ・テーマに関連した課題別視察を実施した。PYは各訪問先で施設の取り組みについて講義を受けたり、実際に活動をされている方々と交流したりすることにより、各テーマに対する知見を深めた。

DGごとにオンラインと対面あわせて６回のセッションを行った後、成果発表会に向けての準備を行う時間を設けた。

成果発表会に向けては、ファシリテーター主導の下、各DGから自発的に成果発表会運営委員を選出し、その運営を行った。成果発表会本番では、各DGがディスカッション活動を通して学んだことや今後のアクションプラン等を発表した。

b. 事後活動セッション

事後活動セッションでは、各国事後活動組織代表者が自国のPYに対して次のことを行った。

① 各国における事後活動組織及びSSEAYPインターナショナルの目的、活動状況等についての理解を深めさせ、PYがSSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動へ積極的に参加するよう促した。
② 既参加青年がプログラム中に企画したプロジェクトの実施状況や成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。

（3）ファシリテーター

ディスカッション・テーマ	氏名	国名
① 質の高い教育	Mr. Ari Yuda Laksmana	インドネシア
② ジェンダー平等、女性活躍の推進	Ms. Miryam Justo	ペルー
③ 経済成長と住み続けられるまちづくり	Mr. Felipe Salgado de Souza	ブラジル
④ エネルギー、気候変動対策、循環型社会	Ms. Ireni Sufinah Ali Rahman	ブルネイ
⑤ 健康とウェルビーイング	Mr. James Seow	シンガポール

（4）ディスカッション活動の流れ

プログラム前		PYは各国にて事前課題等の準備

↓

オンライン交流	11月12日 16:15~18:00	グループ・ディスカッションI
	11月19日 16:15~18:00	グループ・ディスカッションII

↓

対面交流	12月4日 19:00～21:00	グループ・ディスカッション III
	12月5日 9:00～17:00	課題別視察（DG別）
	12月5日 19:00～21:00	グループ・ディスカッション IV
	12月6日 10:00～12:00	グループ・ディスカッション V
	12月6日 14:00~17:00	グループ・ディスカッション VI
	12月6日 19:00～21:00	成果発表会の準備
	12月7日 10:00～11:00	成果発表会
	12月7日 14:00~15:00	事後活動セッション

2 ディスカッション活動・各グループのレポート

(1)質の高い教育グループ

ファシリテーター: Mr. Ari Yuda Laksmana
PY: 22名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年（PY）は、日本とASEAN各国の教育分野における現状と課題を理解し、教育全般（キャリア教育や変化する時代に応じた教育など）に青年がどのように貢献できるかを議論する。

b. 期待される成果

- 質の高い教育の理想的な姿勢と、それが持続可能な開発目標（SDGs）に向けた貢献にとってどう必要かを理解する。
- 分かち合った知識や理解を併せることによって、現在の日本とASEAN各国に適用可能な枠組みを作る
- 各自の手の届く範囲でできる、SDGs目標４「質の高い教育」の目標に関する具体的な貢献やプロジェクトのアイデアを（メディアやその他のステークホルダーに）公開する。

c. 身につく能力

知識

- 日本とASEAN各国の教育分野における課題とベストプラクティスを理解する。
- SDGsに向けた貢献に関するプロジェクト企画、広報、パートナーシップにおける実践的手法を理解する。

スキル

- バード・イン・ハンド・ツールを使って、実用的で現実的なアイデアを見出せる。
- テクノロジーおよび非テクノロジーにおける進歩を通じてSDGsの実現を加速させ得る機会について分析できる。
- 広報やパートナーシップを通じて、アドボカシー・プログラムを企画できる。

行動

- 問題解決、分析的思考、企画力を発揮できる。
- ディスカッションやプレゼンテーションにおいて、双方向のコミュニケーションを尊重し、影響力を発揮する。
- 記者会見やパートナーシップの提案において、問題に対する感受性の高さと自信を示す。

B. 事前課題

課題 1

面白味のある自己紹介スライドを作成すること。ニックネーム、自分に関する楽しい豆知識、プロフィール写真、SDGs目標４についての自らの見解を盛り込み、さらにSDGs目標４の文脈における理想的な質の高い教育とは何かを定義して、それを説明するイメージ画を１枚添えること。

課題 2

『SDGs報告2023：特別版』を読み、SDGsに関する青年の声についての記事から刺激を受けること。

課題 3

国別課題として、自らの国におけるSDGs目標４「質の高い教育」に関する課題（制度、構造、政策、文化、教育技術、キャリア教育、教育の未来に限らなくてよい）について議論すること。

課題 4

国別課題として、PYの声明となるプレスリリースを草稿すること。これには、なぜ自国においてSDGs目標４を達成することが重要なのか、自国または最も身近なコミュニティにおいて青年としてSDGs目標４を達成するためにどのような貢献が可能か、パートナーシップに向けた行動喚起（誰に対する、どのような貢献が期待されるのか）を含むこと。

課題 5

国別課題として、提案型のプレゼンテーションを草稿すること。その際、自国におけるSDGs目標４に関した現在の課題についての問題提起、これを裏付けるファクトシート、SDGs目標４を達成するうえで、潜在的なパートナーがなぜ当該提案を受け、協力するのか、個別具体的に説明すること。

C. 活動内容

課題別視察

施設: 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

活動

a. レジデント・アシスタント（RA）による自己紹介と質疑応答、留学生たちとのイベント運営を行うRAの生活について知る。
b. GiFTの自己紹介
c. 「質の高い教育」およびその構成要素についての説明
   1) 持続可能な開発のための教育
   2) グローバル・シチズンシップ教育

3) 緑化教育

d. グローバル・シチズンシップ、またグローバル・シチズンシップがビジネスにおけるESG（環境、社会、ガバナンス）といかに整合するかについての説明

e. GiFTにおける様々な活動の紹介（例）
- 共創型海外研修『Diversity voyage』
- 学生向けの活動
- 教師や自治体向け研修
- ラーニング・プラットフォーム

f. 共創型の革新的教育プログラムの事例紹介

視察から学んだこと

a. 課題別視察で取り扱ったテーマを日常的な会話として、よりオープンにし、常態化させるべきである。

b. 「東南アジア青年の船」事業を通して我々は世界に広がる強力かつ協力的なつながりを築き、問題解決における協力と相互支援を促進することができる。

c. アイデンティティ・ポートフォリオの活動を通じて、私たちは自分たちの最も大切にする価値を見出し、将来的に何を創り出したいかのガイドラインとした。

d. 「Think Globally, Act Locally」の考え方によって、よりグローバル・シチズンシップを創出できるようになった。この考え方のもとでは、誰一人教育から取り残されるべきでなく、ゆえに我々はいかなる格差をもなくし、より包括的であろうとする。

e. 基礎教育と自身に焦点を当てて、自らの掲げる目標を達成するうえで身近な人物を一人設定する。個人的なストーリーを、自身の活動に用いる。

グループ・ディスカッション I

ねらい

a. グループ内のPYが互いについて知り合う。

b. 日本および東南アジア各国での、SDGs目標４の文脈における、質の高い教育に関して共通認識を設定する。

c. 2030年以降、SDGs目標４が実現された理想的な教育の質とはどのようなものか定義する。

活動

a. アイスブレイク活動「私の好きなバーチャル背景」では、PYが自分の好きな伝統的な食べ物に関するバーチャル背景を追加し、その食べ物にまつわるストーリーを共有しながら自己紹介をする。

b. グループ・ディスカッションの議題や目的の紹介

c. ブレイクアウトルームに分かれて、SDGs目標４の文脈における質の高い教育について議論する。また、事前課題で作成したビジュアルを用いて、SDGs目標４が達成される理想的な質の高い教育について議論する。その後、ブレイクアウトルームからメインルームに戻って、プレゼンテーションを行う。

d. まとめと振り返り

成果

a. 互いの好きな料理や果物を知ることを通じて、より深く知り合うことができた。

b. 将来のSDGs目標４達成に向けたアイデアと目標を共有した。

c. 日本及び東南アジアの教育分野における現状と課題を理解した。

d. 質の高い教育を表す言葉を各自一語挙げることを通じて、質の高い教育を定義した。

e. DG1はチーム一丸となって、質の高い教育という新たな理想を共創し、最終的には次のように定義した。「理想的な質の高い教育とは、質の高い教材と有能な教師への包括的で公平なアクセスが含まれ、個人が生涯にわたって学習し自らの潜在能力を最大限に発揮するための準備を整えるものである。」

グループ・ディスカッション II

ねらい

a. SDGs目標４で定義される「質の高い教育」の達成を促進するうえで各国の足枷となる主な課題を三つ特定する。

b. 影響力の度合に即して同心円状に外側から中心へ並べるように課題をマッピングする。

c. これらの課題を克服するために、PYの手の届く範囲で実践可能な手法を二つ得られるよう意見を出し合う。

活動

a. 主要な論点の復習、資料の簡単な紹介、タスクと期待される成果の説明。

b. 教育制度についての国別の５分間プレゼンテーションおよび各国がSDGs目標４の達成に際して直面している課題の調査（プレゼンテーション中に２回のアイスブレイクあり）。

c. ブレイクアウトルームに分かれ、オンラインホワイトボード（Jamboard）を用いて議論したうえで主要な課題を三つ特定し、引き続きディスカッション・プレゼンテーションを行う。

d. 影響度合いを同心円状にマッピングした結果を簡単に共有した後、ブレイクアウト・ルームに分かれて、課題解決に向けてPYができる範囲での実践的な手法を二つ得るべく意見を出し合う（Jamboardを使用）。

e. まとめと振り返り

成果

a. PYは、SDGs目標４を推し進める上で自国が直面している主要な課題三つについて話し合い、その課題について、互いを尊重しながら生産的な議論を行うことができた。

b. どのグループも、「影響の輪」を使って話し合い、課題をマッピングすることができた。

c. ブレイクアウトルームでは、どのグループも、自分たちの実現可能な範囲内で課題を克服するための現実

的な手法を二つ得るべく意見を出し合った。課題と手法については全て、Jamboardにまとめられた。

グループ・ディスカッション III

ねらい

a. グループ・ディスカッションにおけるPYの人物面での関わり合いを創出する。
b. バード・イン・ハンドの概念を理解する。
c. 青年としての個人的な強みと可能性を見つける。
d. 課題に向けた取り組みに関し、手の届く範囲で具体的にできそうな貢献を二つ見いだす。

活動

a. アイスブレイク活動「直感カード」では、PYたちが再び自己紹介をし、各自が任意に手にしたカードの絵について「この絵は、あなたと教育をどのように表していますか」という質問に回答する。
b. 主要な論点の復習、資料の簡単な紹介、タスクと期待される成果の説明
c. バード・イン・ハンドについての簡潔な説明
d. 「バード・イン・ハンド」自己分析についてのワークシート活動
e. PYたちの「バード・イン・ハンド」に向けたミニ・グループ・ディスカッション
f. 課題に対して具体的な貢献を二つ見いだすためのワークショップ
g. 「貢献が実を結ぶために、PYは何を準備または改善する必要があるか」という問いに答えることで振り返りを行う。

成果

a. PYは、「直感カード」の活動を通して、互いの直感や願望をより深く知ることができた。
b. PYは、バード・イン・ハンドの概念を通して、自分自身をより深く理解することができた。
c. 各グループは、前回からの具体的な二つの貢献の可能性について議論し、グループ内で議論された内容に基づいてプレゼンテーションを続けることができた。
d. 自分たちの具体的な二つの取組を改善する方法に関して各グループで振り返りを行った。
e. 各グループはチームに分かれ、2回目のオンライン・ディスカッションで行われた活動についてさらに議論を深め、地域レベルでそれらの問題に対処するうえでの課題と、自分たちの出来る範囲での具体的な手法を見いだした。
f. 最後に、次のステップ、また即座に取るべき行動について、グループ内で簡潔に話し合った。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

a. テクノロジーを含む、革新的な力の影響について検証する。
b. テクノロジーによる革新が地域協力にもたらす機会は何かを見いだす。
c. 技術が適用できない場合の代替案を見いだす。

活動

a. PYが課題別視察先（GiFT）から得た知見を、PYの取組と関連させたうえで、グループで共有した。
b. 主要な論点の復習、資料の簡単な紹介、タスクと期待される成果の説明
c. SDGs目標4の達成という課題に包含される革新的な教育と一般的なテクノロジーに関連して、EduRuptors（エデュケーション・ディスラプター）について自分たちが理解していることについてグループで話し合う。その後、プレゼンテーションを行う。
d. グループ・ワークショップとして「マイ・ディスラプション・キャンバス」を用いて、プロジェクトへの貢献を実現することをサポートする適切なテクノロジーを見いだす。その後、プレゼンテーションを行う。
e. テクノロジーを介さずに、各自がプロジェクト遂行上の課題についてQ&Aを作成する「私の中のAI」という質問を出す活動を行う。
f. まとめと振り返り

成果

a. PYは「ディスラプション・キャンバス」を用いて、自分たちの取組を改善することができた。
b. 「Think Globally, Act Locally」に言及し、その意味について議論できた。
c. EduRuptors（エデュケーション・ディスラプター）とは何かを理解できた。

グループ・ディスカッション V

ねらい

a. 広報とそのツールについて用い方を理解する。
b. 対外的なメッセージを作成し、ソーシャルメディアを活用する。
c. 記者会見において演説を行う。

活動

a. 前回に引き続き、非テクノロジーの取組に関するセッションで、各PYは、テクノロジーがない場合の取組について、それぞれの選択肢を共有した。
b. ステークホルダーは通常、投資する前に、アイデア、ロジック、事実、プロジェクトのインパクトに注目するため、それぞれのグループで、ロジック、アイデア、事実、インパクトのモデルを用いて、参加青年はアドボカシー・メッセージを作成した。
c. C1「つながり」、C2「コンセプト」、C3「具体的な実践」、C4「結論」を使って、ソーシャルメディア・コンテンツの流れを作った。
d. DG1のWhatsAppグループでリールビデオが共有された。

e. メディアとの関係、そしてSDGs目標４で提起された問題に注意喚起するようメディアに発信するツールとして記者会見をどう活用できるかについて概説した。残念ながら、プレスリリースのディスカッションや記者会見のシミュレーションは、時間的な制約などから実施できなかった。

成果

a. 前回の終了時とは異なり、PYはテクノロジーに頼らない取り組みやプログラムを実施するための他の選択肢を模索することに、より積極的で自信気であった。
b. ロジック、アイデア、事実、インパクトの概念を使って、PYはそれぞれの取組に資するアドボカシー・メッセージを作成することができた。
c. C4のコンセプトを使ってリールを作る活動を通して、アイデアがより整理され、参加青年は予想よりも短い時間で面白いリールを作ることができた。

グループ・ディスカッション VI

ねらい

a. SDGs達成におけるパートナーシップの緊急性を理解する。
b. パートナーシップにおける互恵的な戦略を策定する。
c. 提案と交渉を実際に行ってみる。

活動

a. 主要な論点の復習、資料の簡単な紹介、タスクと期待される成果の説明
b. 戦略的パートナーシップの築き方についての概説
c. 一万円を分けるゲームとその振り返り
d. 互恵的パートナーシップ戦略の築き方についての概説
e. 提案書の作成についてのグループ・ディスカッションおよび提案のシミュレーション
f. エレベーター・ピッチのゲームおよびその振り返り
g. まとめと振り返り

成果

a. PYは、健全で戦略的なパートナーシップを維持することの重要性と利点を学んだ。
b. 一万円を分けるゲームを通して、参加青年は「互恵的公平性」の概念と、合意しうるゾーンに即して最も望まれる結果と最も望まれない結果がどのように生まれるかを探求した。
c. 対立状況をシミュレーションするロールプレイである「汚いオレンジ」の活動では、市場にある限られた資源の中で、様々な利害関係者がどのようにコミュニケーションを取り、協力し合うことができるかを理解した。
d. またPYは、見込み顧客のニーズを掴み、それに対応するために様々な視点を用いることや、１分間のエレベーター・ピッチを簡潔に行うことについても学んだ。

成果発表準備

ねらい

a. ディスカッション・プログラム全体からの学びを振り返る。
b. 成果発表会に向けたプレゼンテーションの準備

活動

a. プレゼンテーションの概要作り
b. プレゼンテーションの作成
c. リハーサル
d. 振り返り（残念ながら、ディスカッション・プログラムの振り返りについてグループ活動を行うには十分な時間がなかったが、DG1のために特別に用意したオンライン・アンケート・フォームを通じて、その内容を把握した）

成果

a. PYは、DG1というチームにおいて、それぞれの役割分担を含め、プレゼンテーションの概要や流れを共同で作成することができた。
b. PYは、発表内容を「はじめに」、「何を学んだか」、「アウトプット」、「結論」、「今後の取組」の五つに分けることで合意した。
c. 担当のPYがプレゼンテーションのスライドを作成し、リハーサルを行うことができた。

D. 成果発表会

プレゼンテーションは10分の枠内でとてもうまく行われ、その内容は、以下に即したものであった。

a. ディスカッション・テーマに対する回答および質の高い教育の定義の共有
b. 各回を通じて学んだもの
c. アウトプットや成果
d. 結論および今後の取組

発表は、インドネシア、ラオス、マレーシア、ベトナムのPYたちによって行われ、ディスカッションを通じて、グローバルな知識、リーダーシップ、実践的なアドボカシーやパートナーシップのスキルが向上し、「Think Globally, Act Locally」に行動するという姿勢が身に付いたと結論付けられた。

E. 今後の活動計画

PYは５つのグループに分かれて活動計画を立てた。各グループの名前は、その活動計画に関連した意義のあるものとして、参加青年たちがそれぞれ名付けた。

a. “Global Explorer”グループは、グローバル・シチズンシップ教育に対する意識を高めるデジタル・アドボカシー・キャンペーンを行うことを目的としている。
b. “The Big 5”グループは、性格心理テストや学校のプログラムに組み込むカリキュラムを扱うキャリア・メンタリング・ネットワークに注力する。

d. “EduVoyagers” グループは、ソーシャル・ギフティングと研修プログラムを通じて、教育のエンパワーメントを目指す。
e. “F.R.I.E.N.D.S” グループは、地域における教育者同士のネットワークの醸成と、学習におけるゲーミフィケーション・アプローチの発展に注力する。
f. “Future’s Passport” グループは、グローバル・シチズンシップと平和構築を促進するためのオンライン教育・文化交流プログラムを通じて世界を開いていく。

F. PYの声

a. DG1のセッションは、特に課題別視察でのGiFT訪問など、良質な示唆に満ちていた。教育業界に直接携わっている他のメンバーと話し合うことで、質の高い教育を受けることの重要性に気付かされた。
b. ディスカッションを通じて、私は自分のアイデアを行動に移し、世界に対して影響を与えられる可能性を掴むことができるようになった。本事業を通じて築いた人脈を活用することで、現実的で持続可能なプロジェクトが、夢でなく現実へと変わる。今は遠い目標に見えても、実際に達成可能なのだ。地球市民として、私は学び続け、自分の知識を使って世界に前向きな変化をもたらすことを目指している。
c. 自信を失うこともあったが、話を理解し、自分の意見を伝えることに全力を尽くした！みなさん、ありがとうございました！
d. オンライン・セッションでの課題や各国の教育制度についての理解や深化には連続性がなく、必ずしも全員が皮膚感覚を持てるわけではない議題に対して国を越えて取り組むのは大変だ。
e. DG1でのディスカッションの間、積極的に協力し合い、全てのセッションに力を注いだ。回によっては情報量が多すぎることもあったが、全て良かった。
f. 示唆深いディスカッションで、ファシリテーターはとても楽しめる形で、質の高い教育の問題を提起してくれた。

G. ファシリテーター所感

嬉しいことに、時間に余裕がない程詰め込まれたこのハイブリッド・プログラムにおいて、ディスカッションの目的を達成する上で持たれた懸念は全て解消されるに至った。時と場合に応じたディスカッションの形態をとることや、好ましくない状況に対応するための調整などがあり、毎回冒頭から暗中模索だったが、蓋を開ければPYは、質の高い教育や関連する取組に関して、実りある経験を積み、実践的な知識や技能を高めることができたことで敬意を表し、肯定的な感想を述べてくれた。

改善すべき点もいくつかあったように思われる。午前にもセッションがあれば、毎回のディスカッションの設定（および事前設定）において、誰も取り残すことなく、並行的でないアジェンダを提供するなど、参加青年がより深いディスカッションを行えるような環境を与えることができたであろう。

最後に、本事業のディスカッション・プログラムにファシリテーターとして参加させてくださった内閣府ならびに一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様に厚く御礼申し上げる。

Mr. Ari Yuda Laksmana

(2) ジェンダー平等、女性活躍の推進グループ

ファシリテーター：Ms. Miryam Justo
PY：22名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年（PY）は、日本とASEAN各国における男女共同参画の現状と課題を理解し、男女を問わず若者が社会に参加し活躍できる環境作りにどのように貢献できるかを話し合う。

b. 期待される成果

PYが本ディスカッション・セッションを修了した暁には、多様性、公平性、インクルージョンの視点を通じて、ジェンダー平等と女性活躍の推進の問題を探求するための知識、スキル、行動を身につける。上記を達成する方法は以下のとおりである。

- ジェンダー平等と女性活躍の推進に対する自分自身の立ち位置と個人的な見解について振り返る。
- ジェンダー平等と女性活躍の推進に対する他者の見解を理解しようとすることで、異なる視点を持つことを実践する。
- 多様性、公平性、インクルージョンの視点をもって社

会で積極的な役割を果たし、行動を起こすために役立つ概念やツールを探し、自分の手の届く範囲においてジェンダー平等と女性活躍の推進に影響を与える。

c. 身につく能力

知識

- ジェンダー、エンパワーメント、ジェンダー・バイアスとジェンダー・ステレオタイプ、多様性、平等と公平、インクルージョン、特権とアライシップの概念を理解する。
- いかにジェンダーが他の社会的存在と絡まり、ジェンダー平等や公平性、特権的なジェンダーに関係しているかを理解する。
- ジェンダー平等と女性活躍の推進に関し、日本及び東南アジアにおける現状を理解する。

スキル

- 自己認識
- 物事の見方
- リーダーシップスキル
- チームワークスキル

行動

- 自分自身の世界観や視点の持ち方について考察を続ける。
- ジェンダー平等と女性活躍の推進を世に広げるため、社会で積極的な役割を果たすことを志す。
- アライシップ及びインクルーシブな行い

B. 事前課題

課題 1

各PYは、国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）５「すべての女性と女児のためのジェンダー平等とエンパワーメント」の中から一つのターゲットを選び、自分の名前と参加国を紹介し、SDGs目標５と選んだターゲットが自分にとってどのような意味を持つのか、自国の状況、その達成に貢献するために何ができるのか（あるいはしているのか）を簡潔に説明した１分半の英語のビデオを作成し、提出すること。ビデオはプロフェッショナルなものである必要はなく、商業的に制作されたものである必要もない。自宅で、携帯電話やパソコンによる作成を奨励する。

PYは、共有ドライブにビデオをアップロードする必要があり、ディスカッション・セッション開始前に、自分のペースでビデオを見始め、互いのことを知り、モチベーションを高めることができた。そして、ディスカッション・セッションでは、会話を弾ませ、グループ・ディスカッションの内容を充実させるべく、様々な視点を提供するために、多くのビデオが用いられた。

課題 2

グループ・ディスカッションのテーマ「ジェンダー平等と女性活躍の推進」に関し、プログラム終了後に実施したい、具体的かつ現実的で関連性のある社会貢献活動を、国別で考えること。

パワーポイントやビデオではなく、創造力を駆使してテクノロジーに頼らずビジュアルを作成すること。グループ・ディスカッションVIにおいて５分間のプレゼンテーションが求められる。

C. 活動内容

課題別視察

施設: NPO法人ジェンダーイコール

活動

a. NPO法人ジェンダーイコールの代表理事によるセミナーで、日本の学校におけるジェンダー問題など、日本のジェンダーギャップの実態についてデータや情報が提供された。
b. パーソルテンプスタッフ株式会社の企業内大学「Temp University」による、企業におけるジェンダー平等と公平な女性雇用に向けた取組についてのプレゼンテーションが行われた。
c. 小グループでの話し合いが２回行われ、１回目はジェンダーイコールのユースメンバーとの交流、２回目はテンプスタッフ株式会社の社員の方々との交流であった。PYは自国の現状を共有し、男女の格差や日本における女性の労働について質問が行われた。

視察から学んだこと

a. PYは、数値データを通して、教育、健康、経済、政治の四つの分野における日本の男女格差について学んだ。
b. 証言や共有された経験を通じて、PYはジェンダーギャップがもたらす影響について学んだ。
c. 一般的に日本社会におけるジェンダーギャップの問題は道半ばであるが、ジェンダーイコールやパーソルテンプスタッフのような組織が、是正に向けた啓蒙活動や教育キャンペーン、研修を行っている。

グループ・ディスカッション I

ねらい

a. ディスカッショングループのファシリテーターと他のPYについて知る。
b. SDGs目標５の基本的なキーメッセージについて学ぶ。
c. 自己認識を深め、反省的な考え方を身に付け、残りのディスカッション・セッションの基調を整え、DG2環境内に安全な空間を構築する。

活動

a. オープニング及びDG2の概要説明
b. アイスブレイク活動を通じたファシリテーター及びPYの自己紹介
c. グループの決め事
d. SDGs目標５への導入（第１部）
e. 提示された質問に対する小グループに分かれてのディ

スカッション
f. 活動「夢と心配事」
g. まとめと振り返り、グループでの共有
h. クロージング及び次回に向けた期待

成果

グループ・ディスカッションIでは、グループの規範を確立し、プロフェッショナルでカジュアルな雰囲気を醸成し、ASEAN各国と日本のSDGs目標５に関するデータや傾向について学び、PYが期待や心配事、学習経験を高めるためにグループにもたらした知識、スキル、行動を共有するに至った。

グループ・ディスカッション II

ねらい

a. SDGs目標５に関連する中核概念について議論し、学ぶ。
b. ディスカッションや参加者のビデオを通じて、ASEAN各国と日本におけるSDGs目標５について学ぶ。
c. 異文化への関与、多様性、公平性、インクルージョンの重要概念を学ぶ。
d. ジェンダーの固定観念と一般化及びそれらが個人に与える影響について説明し、探し出す。

活動

a. 前回のまとめと振り返り
b. 事前課題のビデオ視聴及び結果の共有
c. プレゼンテーション：SDGs目標５の「なに」と「なぜ」（第２部）
d. 異文化への関与、多様性、公平性、インクルージョンの概念の紹介
e. ジェンダーの固定観念と一般化及び小グループでのディスカッション
f. まとめと振り返り
g. クロージング及び次回に向けた期待

成果

グループ・ディスカッション IIでは、PYがASEAN各国と日本のSDGs目標５にまつわる現実を学び、エンパワーメント、多様性、インクルージョン、異文化への関与、ジェンダー・ステレオタイプの概念とそれが個人に与える影響について考察するに至った。

グループ・ディスカッション III

ねらい

自分達の社会的アイデンティティの違いや、自分のジェンダーが自分自身の他の側面とどのように関係しているかを振り返る。

a. あらゆるジェンダーに属する人々の背中を押し、正当にする方法の探求及びディスカッション
b. ディスカッションやPYによるビデオを通して、ASEAN各国と日本のSDGs目標５について学ぶ。

活動

a. 前回のまとめと振り返り
b. 事前課題のビデオ視聴及び結果の共有
c. ペアになって共有する活動を通じてのアイデンティティ・マップ作り
d. 自分について振り返る活動「足を引っ張るか、背中を押すか」
e. まとめと振り返り
f. クロージング及び次回に向けた期待

成果

初めて対面で行ったディスカッション・セッションでは、自分たちの異なる社会的アイデンティティとジェンダーが、人種、社会的・経済的地位、能力などにどのように現れ、どのように関係しているのかを振り返った。また、PYは、あらゆるジェンダーに属する人々を受け入れるために実践できる具体的な行動を考えた。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

a. 課題別視察の報告、ディスカッション、PYによるビデオを通じて、ASEAN各国と日本におけるSDGs目標５について学ぶ。
b. 社会におけるチェンジ・メーカーとしての積極的な参加について自身を振り返る。

活動

a. アイスブレイキング
b. 前回のまとめと振り返り
c. 課題別視察及びそこで得た主な学び
d. ジェンダー：先天的か後天的か
e. 振り返り
f. まとめ及び次回に向けた期待

成果

課題別視察での学びとインスピレーションについて振り返り、少年、少女、男性、女性であることに関する社会的構築物（規範、行動、役割）としてのジェンダーと、異なる社会でどのような不平等や差別が存在するかについての見解を比較しながら、自分たちの結論を見いだした。

グループ・ディスカッション V

ねらい

a. ディスカッションを通じて、日本とASEAN各国におけるSDGs目標５について学ぶ。
b. 自分の偏見について認識し、それに対して疑問を投げかけることの重要性を理解する。
c. 特権とは何か、また、それがすべてのジェンダーに属する人々の背中をどのように押すことができるかを言葉にし、分析する。
d. ジェンダーの平等と女性活躍の推進のために、その

賛同者としてすることができる主なトピックと行動を明らかにする。

活動

a. 前回のまとめと振り返り
b. 無意識の偏見とジェンダー
c. ジェンダー公平性とジェンダー不平等
d. 特権：変化のためにどう使うか
e. アライシップ：やってみよう
f. クロージング及び次回に向けた期待

成果

目的に適った回となった。付箋を使ってポスターを作成し、ジェンダー・バイアスについての考えを共有した。また、特権の概念、平等と公平の違いについて学び、小グループで、シナリオに沿って、アライシップを実践するための戦略を考えた。

グループ・ディスカッション VI

ねらい

a. ディスカッションやPYによるビデオを通じて、ASEAN各国と日本におけるSDGs目標５について学ぶ。
b. SDGs目標５達成に向けた積極的な社会参加のためのアクションプランを策定する（事後活動としての社会貢献）。

活動

a. 前回のまとめと振り返り
b. ジェンダー平等と女性活躍の推進の達成を支えるための積極的な社会参加に向けた行動計画を作成する：社会貢献活動／事後活動（国別）。
c. 事後活動の発表をし、１対１での質疑応答やコメントを行った。
d. 成果発表会に向けた準備の話合い
e. グループ内での労い：愛の言葉

成果

国別で事後活動の計画について話し合い、最終的な決定を下し、意見を交換し、グループ全員の前で発表が行われた。同じく、成果発表会でのプレゼンテーション担当者を選出し、いくつかコンセプトを明確にするための質疑が行われた。また、残務の仕事分担がなされた。

成果発表準備

ねらい

チームワーク及びリーダーシップスキルを発揮して、成果発表会における10分間のプレゼンテーションの内容と流れを協力してデザインし、準備する。ASEAN各国と日本におけるジェンダー不平等の問題を紹介する短いビデオを録画・編集し、セッションIからVIまでの学びをまとめ、印象的なプレゼンテーションを行う。

活動

a. 成果発表会に向けて自分たちのプレゼンテーションの設計や計画を練り、以下の項目について決定した。
   - テーマの内容と順序
   - プレゼンテーションの手法と形態
   - 必要な資料等
   - 発表者

成果

PYは、ビデオを含めて10分間におよぶ中身の詰まったプレゼンテーションを準備し、練習を行った。

D. 成果発表会

DG2は、３人の発表者と１人の技術サポート担当者がグループを代表してプレゼンテーションを行った。また、DG2には成果発表会の運営委員会のメンバーが１名おり、本番はタイムキーパーを務めた。その他、DG2におけるほとんどのPYは、プレゼンテーションの内容やデザインに携わった。プレゼンテーションでは、以下のような点が発表された。ジェンダーが社会的構築物であることを認識することが重要であり、まずは自分の身の回りから始め、ジェンダー・バイアスを見つけて立ち向かう必要があり、ジェンダーの固定観念にとらわれない必要がある、ということ。ジェンダー平等とジェンダー公平性について。全てのジェンダーに対してインクルーシブになり、社会における望ましい変化の一端を自らが担うために、なぜ私たちは、異なる考えを持つ者に耳を傾け、自分たちのストーリーを伝え、自分たちの持っている特権を認識し、それを使ってアライシップを実践する必要があるのか。

E. 今後の活動計画

DG2のPYは、それぞれの国で、対面・オンラインの両方で、様々な社会貢献活動を行うことを約束した。その中には、政府機関、中学・高校、民間、非営利、一般市民を対象とした研修ワークショップや啓発セッション等の活動も含まれ、多岐にわたる。プロジェクトは都市部のコミュニティに関するものが多かったが、他にも若者や親世代を含む農村部の人々を対象としたものもあった。教育の重要性を中心として、女性や女の子たちに様々な機会を提供すること、ジェンダー平等と女性活躍の推進、性的暴行について話せる安全な場を作ること、親密なパートナーからの暴力、性と生殖に関する健康などに関するものが展開されている。

F. PYの声

a. ジェンダー平等と女性活躍の推進に関する内容と、ファシリテーションスキルを学べた。
b. ファシリテーターは参加を促して、快適な空間作りをしてくれた。
c. 複雑なトピックをとても分かりやすく伝えてくれた。

d. 示唆に富むディスカッションだった。
e. 楽しい時間を過ごせ、また多くを学んだ。
f. ファシリテーターによる快適な学習空間だった。
g. 毎回、他のPYや自分自身についてよりよく知る機会となった。
h. NPO法人ジェンダーイコールの方々の力の入れようには触発された。

G. ファシリテーター所感

内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、第47回「東南アジア青年の船」事業の皆様、そして特にDG2のPYたちに向けて、そのご尽力に対し心より感謝申し上げたい。全ての関係者の信頼と協力があってこその成功であり、ディスカッション・テーマが広範で複雑なものであったにもかかわらず、参加型で安全な空間が作られたことが鍵となり、大いなる学びと触発しあう雰囲気が可能となった。これは、DG2のPYが帰国後に予定している社会貢献活動の質に反映されている。

Ms. Miryam Justo

(3) 経済成長と住み続けられるまちづくりグループ

ファシリテーター: Mr. Felipe Salgado de Souza
PY: 22名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年（PY）は、交通インフラや公共空間を含む、日本とASEAN各国における生活環境と災害の現状と課題について理解し、環境面から見て持続可能でレジリエントな都市の発展に対して青年にどのような貢献ができるかを議論する。

b. 期待される成果

- 持続可能な開発に関する世界的な課題と、それが特に経済成長と生活環境の面で、日本及びASEAN各国にどのような影響を及ぼすかを認識する。
- 持続可能な開発目標（SDGs）、そのメカニズム、目的、実施手段、青年の役割、日本及びASEAN各国における達成状況などについて十分に理解する。
- 日・ASEAN協力の中で青年のネットワークと関与を強化しながら、我々が分かち合う未来を阻害する持続可能性の課題に向けた行動を起こすやる気を得る。

c. 身につく能力

知識

- SDGs目標８、９、11、17について、目標や課題同士がどう関わりあうか
- 経済発展や生活環境に関する日本とASEAN各国の異なる現実
- 経済発展、人間居住、持続可能性、国際協力の背後にある基本的概念

スキル

- 他のPYと実りある有意義な交流を行うために必要なコミュニケーション能力や批判的思考能力とともに、異文化に対する感受性を養う。
- チームで働き、ディスカッションの成果を発表することができるようになる。
- 地域レベルから国際レベルまで、様々な視点からトピックを分析する。

行動

- 出身、民族、信条、意見などの違いにかかわらず、他者を尊重すること。
- 自分の意見を率直に伝え、建設的な方法で他者の意見に耳を傾ける意欲
- 各自の地域社会で変革の担い手となり、社会をより良い未来へと導く意欲

B. 事前課題

ディスカッション・グループ（DG）のPYが全員、主題に対して同程度の知識と理解を持つようにするため、以下の課題が求められた。

課題 1

SDGs及びそれがあなたの国でどのように行われているかを調べ、達成率の高い目標と低い目標を見つけ出す。

課題 2

あなたの国でSDGsの実現を妨げている可能性のある障害を調査する。

課題 3

あなたの街や地域の代表的な場所（観光地、歴史的建造物、住宅、店舗、道路、公共交通機関、公園、自然など）の写真を10枚以上撮り、写真に写っている良い面と悪い面の両方について考えてみよう。

課題 4

あなたの国で変化を促進しようとする青年主導の組織について調べること。何をしている組織だろうか。

課題 5

最後に、あなたが信じる大義について考え、なぜその大義に取り組むことが重要なのかを説明しよう。その大義がSDGs目標８、９、11とどのように関連しているかを考えること。

C. 活動内容

課題別視察

施設: 株式会社 HITOTOWA

活動

a. 導入の講義：組織、使命、目的、メンバー、プロジェクトなどの紹介
b. ガイド・ツアー：小岩駅の再開発地区、商店街、コミュニティー・モデル
c. PYの撮った写真についての振り返り及び閉会の挨拶

視察から学んだこと

a. 地域社会の結束の重要性と持続可能性との関係
b. 収益性の高い持続可能なビジネスモデル：民間部門の役割と社会的・環境的責任の共有
c. 感情的価値と経済的価値のバランス及び有形と無形のバランスをとること。

グループ・ディスカッション I

ねらい

a. グループ・ディスカッションの基本についての紹介：概要、参加者、SDGs、グループテーマ
b. 現在の経済・生活水準と持続可能性に関する問題についてPYが考え始めるよう促す。
c. PYの住む各国における現実について学ぶ。

活動

a. 導入：「東南アジア青年の船（SSEAYP）へようこそ！」グループ・ディスカッションの概要、自己紹介、アイスブレーキング
b. 講義：「持続可能な開発目標－未来への地ならし」
c. 議論及び報告：「我々の国におけるSDGs達成状況」
d. 講義：「経済成長とサステナブルな都市やコミュニティーSDGs目標８、９、11－経済から我々の生活環境まで」
e. グループでの振り返り：我々はサステナブルな生活様式をとっているだろうか

成果

PYは、SDGsの相互関連性、特に経済や産業が私たちの生活環境に与える影響について理解し、より持続可能な実践を促進するためのパートナーシップの重要性を理解した。

グループ・ディスカッション II

ねらい

a. 持続可能性の問題に対する参加青年の意識と理解をさらに深める。
b. これらの課題が日・ASEAN関係にどのような影響を与えるかを分析する。
c. 人為的・自然的課題と、レジリエントで再生可能な社会を構築することの重要性について議論する。

活動

a. 導入：「日本及び東南アジアの課題―我々に何ができるだろうか」
b. 講義：「持続可能性にまつわるリスク―予期される課題と予期できない課題、そしてパンデミック後の世界」
c. 議論及び報告：「我々の国において何がSDGsを阻害しているか」
d. 講義：「持続可能性、レジリエンス、再生産されるチームワーク」
e. 日本での対面交流に向けた準備

成果

PYは、レジリエンスや再生を含む持続可能性の主要概念をおさえ、パンデミックのような予期せぬ出来事が、更なる持続可能な社会への一歩をいかに妨げるかを認識できた。

また、来るべき対面交流に向けたガイダンスと実践的なヒントを得た。

グループ・ディスカッション III

ねらい

a. PYを対面交流に迎え、グループにおけるチームワークとPY同士の相乗効果を高める。
b. より良い未来のために行動を起こす具体的な方法に焦点を当て始める。
c. SDGsに関して、また日本と東南アジアにおいての、青年の役割について注意を喚起する。

活動

a. 導入：「我々の架け橋をつくる」
b. ウェルカム活動及びアイスブレイク：「関係性を築こう」
c. チーム作り：「壁に描いてみよう！－期待、気持ち、目標を分かち合う」
d. 講義：「SDGsにおける青年の役割。我々は自分たちの経済と生活水準をどのように変えられるだろうか」
e. グループ活動：「問題解決アプローチ：実際の事例を通じたブレインンストーミング」

成果

PYは、事業への期待や抱負を分かち合うことで、互いにより強い絆を築き、協力するスキルを向上させることができた。さらに、自分たちの手に負えないことよりも、自分たちの手の届く範囲内の行動に集中することを学ん

だ。最後に、実践的かつ直接的な手法で、自らのプロジェクトを立ち上げるための活動に取り組んだ。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

a. 課題別視察の結果を振り返り、収益性の高いビジネスモデルがどのように持続可能で、社会にプラスの影響を与えることができるかを考える。
b. 異なる経済体制を認識し、地場においても国際的にも行動を起こせるようになるべく、SDGs目標８と９を実行に移すために可能な手段について議論する（経済成長と産業とイノベーション）。
c. 社会の様々なセクター間でのパートナーシップの重要性と、日本と東南アジアの協力関係をより良いものにする方法について考える。

活動

a. 導入：「持続可能で再生可能な経済」
b. 株式会社 HITOTOWAにおける課題別視察の振り返り
c. 講義：「持続可能であることは儲かるのか」
d. グループ活動ー持続可能なビジネスを生み出そう
e. 講義：「日本及び東南アジアー青年はどこにいるのか」
f. シミュレーション活動：「自分たちの取組にとってのパートナーを見つけよう」

成果

持続可能なビジネスに対するPYの考え方は、民間が財務的成長を達成し、革新的な製品やサービスを開発しながらも、社会的にプラスの影響を生み出すことができると認識することによって、変えることができた。さらに、青年の持つ力について認識し、望ましい目標を達成するためにパートナーシップを結ぶことの意義を理解することができた。

グループ・ディスカッション V

ねらい

a. 人間の定住、都市化、人間の価値観についての概念や基準について考え、他の参加国における教訓をもとに、自分たちのコミュニティをどのように再構築していくかを考える。
b. SDGs目標11を実行に移すための手段について議論するー持続可能な都市やコミュニティと、革新的な統治モデルの構築

活動

a. 導入：「自分の都市とコミュニティを作り変える」
b. グループ活動：「日本及び東南アジアにおける都市とコミュニティー自分たちのコミュニティについて壁に写真を貼っていく」
c. 小プロジェクト：「理想的な統治モデルを生み出すー新しい機会を見つけ、課題に立ち向かう」

成果

PYは、写真を見せあってコミュニティの課題や機会について話し合うことで、互いのコミュニティについて学んだ。この活動を通じ、互いの国での経験や都市化の特徴を踏まえてより持続可能な統治モデルを構築する方法について考えた。

グループ・ディスカッション VI

ねらい

a. 持続可能な経済と都市を生み出す行動に向けて背中を押す。
b. 日本及び東南アジアにおける青年主導の取組の成功事例について知る。
c. より強力な共同プロジェクトを展開するためには、有意義なパートナーシップを確立することが重要であることを印象付ける。
d. 将来の取組に向けて現実的で協同的な事業に取り掛かる。

活動

a. 導入：「青年の力ー我々は一人ではない」
b. 講義：「リーダーシップ・パラダイムー異なるリーダー像」
c. グループ活動：「日本及び東南アジアにおける青年主導による組織」
d. まとめ：「我々の経済と生活環境を変える」
e. 最後の活動：「ありのまま、繋がり、動こう！ーパートナーシップを結んで、現実的なプロジェクトを作ろう」

成果

PYは、状況や文脈に応じて、リーダーシップに対する理解やリーダーとしての自らの立場について考え直すことができた。さらに、互いの国における青年主導の多様な取組について学び、関心に応じてグループを形成し、自分たちの共同プロジェクトを提案するに至った。

成果発表準備

ねらい

a. 事業期間中のこれまでの足取りと今後の取組
b. 身に付けた知識やスキルを、さらにその先へ役立たせようという意欲を参加者に持たせる。
c. ディスカッションの結論についての発表準備と練習

活動

a. 「将来の自分に向けた手紙」ー自らに新しいエネルギーを吹き込むことの大切さ
b. 命題ーディスカッションの結論を発表する。
c. 準備と練習

成果

本事業を通しての自らの足取りに真摯に向き合い、個人的な手紙を通して、また成果を話し合うプレゼンテーションの準備中にも、自分の考えを伝える機会とするこ

とができた。さらに、成果発表を前にした様々な課題に対し、小グループを効果的に編成することができた。

D. 成果発表会

a. ４名のPYがDGを代表して成果発表を担い、１名のPYが委員として壇上の運営責任者の役割を務めた。
b. 発表の項目は以下の通り：DGのテーマと目的、学んだこと、課題別視察の経験、DGの成果、そして将来の取組である。

E. 今後の活動計画

今後の活動計画について、PYは以下の３種を押し出している。

a. 変革のアンバサダー：経済成長を促し、環境に優しい都市環境を育むことに重点を置き、持続可能な開発目標に即して実行することを推し進める取組。発展と環境への責任が共存可能だと実証し、持続可能な実践のための世界的な基準を確立することを目指している。
b. 変革のコネクター：日本と東南アジアの協力を深め、持続可能な経済・都市開発を促進する具体的な取組を行うことに注力する。イノベーションと環境への責任を取り合わせることで、成長を促しながらも自然と調和した都市空間を生み出すことを目指している。調和の取れた、誰もが享受できる開発をできるようにすることが目標だ。
c. 行動に移すー複雑な課題に共に立ち向かい、よりインクルーシブ、レジリエントで、皆に開かれた未来に向けた持続可能な道を切り開く決意を固めている。インクルーシブな都市プロジェクトから地域における起業家精神の育成まで、様々な取組を実行に移す決意をもっており、単に思い描くだけでなく、目標に向かって効果的に行動するとのことだ。

F. PYの声

PYからのフィードバックは、事業開始前、各ディスカッション・セッション後、事業終了後と、系統立てて用紙を配布して集められた。また、PYの声は、グループ・ディスカッションを日々改善し続けるために繰り返し参照された。最終評価では、PYによれば、極めて肯定的な経験をし、ディスカッション・グループの魅力的で創造的な雰囲気を高く評価し、ファシリテーターの実用的なフィードバックと事業の設計についての賞賛がなされている。また、多様な視点を得る機会、実際の問題に現実的に取り組む機会、都市の複雑さを理解する機会としても評価された。感謝と満足の意や、この事業が楽しさと洞察に満ちた学びを兼ね備えているとの指摘がPYからもたらされている。

個人的に何を得られたかについては、アイデアを生み出す際の協力とチームワークの重要性、国際交流の価値、効果的なディスカッションの設計に関する洞察が挙げられた。また、自分の地域や様々な国が直面している課題について、より深い理解を得ることができたという。さらに、多様な背景を持つ他者から学ぶことで、自国の文化をより深く理解し、互いの強みをいかした協力の可能性を感じたと述べている。

最後に、改善できる点として、もっと多くのセッションと時間を持つことが、事業全体の経験に対してプラスになると強調されていた。そうすることで、より深い考察やより高度な内容、事例研究を盛り込むことが可能になり、ディスカッションでの学びや、より現実的な取組や行動を設計する能力を高めることができたであろう。

G. ファシリテーター所感

もともと「世界青年の船」事業のPY、そしてファシリテーターを経験した私にとって、SSEAYPは全く新しく、心躍る冒険であった。私はブラジル人として本事業に参加した最初の一人となったが、それでも部外者という感覚はまったく抱かなかった。運営側、同僚のファシリテーター、そしてPY側からも温かく迎え入れられたからである。

PYについては、これ以上ないほど最高のグループであった。前のめりで、積極的で、情熱的で、事業全体とグループ・ディスカッションでの経験から自分たちに最良のものを引き出そうと躍起になっているのが分かった。PYが建設的で互いを尊重しながら、自らの考えやアイデア、意見を率直に述べることができる、安全で、インクルーシブで、居心地の良い環境を共に作り上げることができた。ファシリテーターとしての私の役割は、経済成長と持続可能な都市やコミュニティに関連する無数のトピックを通して彼らを導くことだったが、一方で、私もPYから多くを学ぶこととなった。また、ブラジル人ならではの視点を加えながら、日本及び東南アジアについての理解を深めることができた。そしてここで強調しておきたいのは、私たちが現在直面している様々な課題に対処するために、豊かな議論と革新的な洞察を生み出す強力な機能として、多様性が重要であるという点だ。

最後に、私はPYたちが誇らしくて仕方がない。私個人

Mr. Felipe Salgado de Souza

の道を邁進するうえでも、明らかに私はPYから刺激を受けた。私たちは共に、誰もが有意義で価値ある役割を果たし、誰一人取り残されることのない社会を目指したい。そして共に、それを実現しよう。これからは、私たちは新しいSSEAYP/DG3ファミリーとして、この世界にポジティブなインパクトをもたらすことに注力していく。どうもありがとう。

(4) エネルギー、気候変動対策、循環型社会グループ

ファシリテーター: Ms. Ireni Sufinah Ali Rahman
PY: 22名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年（PY）は、日本と東南アジアにおけるエネルギー事情、化石燃料の使用が環境に与える影響を理解し、環境的に持続可能なエネルギー利用を促進する上で青年にどのような貢献ができるかを話し合う。

b. 期待される成果

- エネルギー、気候変動、クリーンで持続可能なエネルギー利用のための循環型社会の価値に関し、日本と東南アジアの国々における現状への認識について足並みをそろえる。
- SDGs目標７：安くて安定的に発電してくれる、持続可能なエネルギー、目標12：つくる責任つかう責任、目標13：気候変動、へ向けた取組について、グループ全体のアイデアを効果的なプレゼンテーションで提示する。
- テーマに向けたアイデアを生み出し、新進のユースリーダーとしての学びや経験に役立つよう、互いに協力を深めることが期待される。

c. 身につく能力

知識

- エネルギーの種類、エネルギーの使用と需要、二酸化炭素排出が環境に与える影響、気候変動の概念、リサイクルの価値について認識する。
- 将来のクリーンで安価な再生可能エネルギーを実現するため、エネルギー転換に向けた世界的な課題を認識する。
- 気候変動対策の緊急性に対する認識を深める。

スキル

- コミュニケーション：自信を深め、質問し、意見を述べる。
- 目標設定にはSMART、アイデア出しにはマインドマップ、情報収集にはフィッシュボーン分析、根本原因分析には5-WHYといったテクニックを用いる。

行動

- 成長マインドセット：学ぶことに前向きで、プラス思考、実行する姿勢
- 対人スキル：他者との交流（多様性と包括性）
- 共通目標の達成に向けてのチームワーク

B. 事前課題

課題 1

300語のエッセイを作成すること。これは、PYの理解の足並みをそろえるためである。各PYが自国の取組を理解することで、自国について振り返りながらその知識をその後の対面ディスカッションに生かすことができる。エッセイは、以下について盛り込むこと。

（1）SDGs目標７、目標12、目標13とは何か。
（2）それらはどのように関連しているか。
（3）異なる目標に対して、あなたの国が現在実践している取組は何か。

課題 2

各PYにとって以下の語句はどういう意味かと、それが「エネルギーと気候変動対策」にどのようにつながるかを説明する、１分以内の簡潔なクリエイティブ・ビデオを作成すること。これにより、PYのディスカッション・トピックに対する理解度がさらによく分かる。対象となる語句は以下から選択すること。

環境、排出、持続可能性、適応、二酸化炭素削減、二酸化炭素、リサイクル、エネルギー転換、再生可能エネルギー、アフォーダブル・エネルギー、3R、成長マインドセット

課題 3

Muralというホワイトボード・ツールの操作に慣れ、事前に設定されているバーチャル食卓に写真を追加したり、初回セッションに向けて「ムードボード」を設定したりするなど、オンライン・セッションの準備をする。

C. 活動内容

課題別視察

施設: ハチドリソーラー株式会社／株式会社ボーダレス・ジャパン

活動

a. 課題別視察に対する期待の設定
b. 株式会社ボーダレス・ジャパンの社会起業に関する概説
c. ハチドリソーラー株式会社の事業ビジョンとミッション、そして現在の日本のエネルギー問題とビジョン

を一致させるための取組に関する概説
d. 同社の第1号顧客とのディスカッション
e. 特定非営利活動法人 CFFジャパンを招いた、同団体のビジョンとハチドリソーラー株式会社と合致する点についてのディスカッション
f. より良い世界に向けて自らが行う今後の取組についてのPY内でのディスカッション

視察から学んだこと

a. PYは、（1）ハチドリソーラー株式会社が、住宅所有者や賃貸住宅所有者の太陽エネルギー適応能力を支援することで、日本のエネルギー危機を最小限に抑える一助となっていること、（2）ボーダレス・グループが、情熱的な社会起業家のビジネスアイデアをゼロから成功するビジネスに立ち上げるための資金援助をしていることに心を動かされた。
b. 社会問題を解決するための社会的起業によるビジネスの概念とその性格を理解した。ソーシャル・インパクトに資することが必要となる。
c. チームワーク、レジリエンス、他者とのネットワークといった社会問題に取り組む際には、リーダーシップの強化が必要であると理解した。
d. ビジネスの価値観、ミッション、ビジョンに持続可能な社会的インパクトの要素が組み込まれていれば、製品を喜んで支持するという顧客がいることを理解した。
e. 社会問題に取り組む上で、小さな行動を段階的に踏み、青年ができることをするのは、何もしないよりも良いことだと理解した。

グループ・ディスカッション I

ねらい

グループへの導入及びテーマ・トピックに対する学習マインド作り

活動

a. Muralというホワイトボード・ツールの操作に慣れる。各自の今の気分を付箋に書いてボードに貼ったり、DG4のルール作りなどを行う。
b. 「バーチャル・ディナー」自己紹介及び好きな食べ物について説明する。
c. テーマ・トピックについてのクイズを教育用ゲームのプラットフォームKahoot!を用いて行い、PYの理解度を測る。
d. SDGs目標7、12、13についてのおさらい
e. SMARTという手法を用いて、ディスカッションの目標を設定する。

成果

PYは互いに自己紹介し、テーマ・トピックについて理解し、ディスカッションを行うにあたり、オンライン・ホワイトボード・アプリケーション「Mural」について学んだ。クイズでは、例えば、パリ協定、代替エネルギーの種類、アップサイクル、カーボンフットプリントの計算方法など、PYが初めて知ったものもあった。また、SMARTメソッドを使って目標を設定すると、具体性、測定可能性、達成可能性、関連性、時間という要素を一覧するうえで役立つことを学んだ。そして、足並みのそろっていない異なるアジェンダを各人が持っていた場合、目標設定はとても大変なものになり得るということが分かった。以上から、共通の目標を達成するためには団結する必要があると感じるに至った。

グループ・ディスカッション II

ねらい

テーマ・トピックに関する問題や課題を一覧する。

活動

a. 前回の復習及びDG4の共通目標の確認
b. 以下の通り三つのブレイクアウトルームに分かれる。（1）エネルギー転換、（2）気候変動対策、（3）循環型社会
c. サブトピックの問題や課題について知っている知識の一覧化
d. 問題や課題に関するディスカッションについてのグループ発表。ここでは、自国における知識があれば紹介するよう助言がなされた。

成果

トピックに関する情報やアイデアを集める「マインドマップ」ツールが紹介され、これにより、情報は視覚的に整理され、アイデアは分類されるようになった。また、自分のアイデアをマップに落とし込む際に、解決モードの頭の使い方をしないことも学んだ。概して、「エネルギー、気候変動対策、循環型社会」にまつわる課題は、以下の通りに分類される。（1）教育と人々の認知、（2）テクノロジーとイノベーション、（3）世界の政策及び戦略、（4）資金の投資、（5）地理的阻害要因

グループ・ディスカッション III

ねらい

この回は「エネルギー」というテーマに焦点を当てる。前回に分類された問題や課題を深く掘り下げ、当該問題や課題に取り組むうえで青年にできる対策を提案することがねらいとなる。

活動

a. 「ハロー・ビフォー・コンテント」各PYには、異なる質問が書かれたカードが配られ、短時間で話し合い、互いの考えを分かち合うことができた。
b. オンライン交流での内容の復習：ディスカッションにおけるルール、グループの目標、前回生じた課題
c. エネルギーの基本形態について見せ、またペットボトルでアフリカの街路を照らすプロジェクト「Liter of Light」のビデオ視聴から、郊外の電気問題を解決

する安価なエネルギーの解決実例を知る。

d. 三つのグループに分かれ、エネルギー転換について深く掘り下げた議論を行う。また、問題をより深く掘り下げるため5-WHYsメソッドをPYに紹介し、試してみる。そして直面した問題への対処法についても議論する。

e. ディスカッションについてのグループ発表及び共有

成果

この回は、PYが互いにテーマについて話し合う初めての機会となり、「ハロー・ビフォー・コンテント」というアクティビティでは、PYたちがホームステイでの興奮や経験、これまでの思いをグループに対し伝えることができた。そして復習の時間をとることでディスカッションに向けた心構えを持つことができた。また今回の活動では、安価なエネルギーという考え方と、エネルギーは革新的な方法で調達できるということを認識することができた。最終的にPYは、世界のエネルギー源が主に化石燃料で構成されており、再生可能エネルギーやネット・ゼロ・エミッションの代替エネルギーの利用を増やすために、エネルギー減の割合を変革することが現在の課題であることを理解した。また、問題の根本的な原因を突き止めるための5-WHYsの手法に触れ、グループ・プレゼンテーションは、自分の知識をグループに向けて発表するやる気を引き起こし、練習の場となった。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

この回は「循環型社会」をテーマとして焦点が当てられた。オンライン・セッションで議論された問題や課題を深く掘り下げ、「循環型社会」に向けた効果的な解決策を導き出すことがねらいである。

活動

a. 「パス・ザ・ボール」最も短い時間内で効果的にボールをパスする（つまり全員がボールに触らなければならない）方法を考え出す。

b. 自分の学びを振り返り、その学びをどのように将来の自分へとつなげていくかを考える。

c. 新たに三つのグループに分かれ、効果的な循環型社会の実現方法について深く議論する。フィッシュボーン法を導入し、参加青年が先に認識した課題について解決する。

d. 解決法について、グループ・プレゼンテーションと共有を行う。

成果

「パス・ザ・ボール」のアクティビティでは、楽しみながら、時間に追われつつも設定された目標を達成するためには、チームワーク、人の話を聞くこと、全員が参加することがいかに重要であるかを学んだ。ここでは、各自が感じたことを皆で話し合う時間をとった。循環型社会を実現できていない主な問題は、消費行動に関連しており、全てのPYは、自分たちが良い消費行動と3R行動を社会に示すロールモデルになれると考えており、リサイクルする習慣ができることに対して直接的に影響を与えられることを期待している。PY達は問題解決に向けて、フィッシュボーン法にも触れたが、5-WHYsに比べ、やや難しいと感じたようだった。しかしながら、安全な学習環境下でそれを試用できたことに喜び、そして循環型社会の効果的なあり方について提案を互いに発表し合った。

グループ・ディスカッション V

ねらい

この回は「気候変動」に焦点が当てられた。オンライン・セッションで議論された問題や課題を深く掘り下げ、それらに取り組むうえで青年にできる対策を提案することがねらいとなる。

活動

a. 「コネクト・ビフォー・コンテント」各自の価値観とこれまでの学びについて共有を行う。

b. 「母なる自然」に関する短いビデオと、母なる自然がどのように機能し、気候が人為活動によってどのような影響を受けるかについて考察する。

c. 国連気候変動枠組条約第28回締約国会議で現在起こっている出来事についてグループ・ディスカッションを行い、気候変動に関する問題を理解し、青年ができる効果的な対策を考える。

d. これまで全ての回を踏まえて、行動計画案をグループでまとめる。

成果

互いの価値観や自己成長についてPY間で深いつながりを築くことから始まり、SDGs目標13は社会が最も注力すべき喫緊の目標であることを学んだ。PYは、（1）生命が存続するためには自然が必要であり、環境への影響を最小限に抑えるために社会からのアクションが必要であること、（2）これまでのセッションのトピックは気候変動へのアクションと連動していること、（3）自然に対する自己責任を変えることから段階的に変化を起こすことが可能であると理解した。気候変動枠組条約第28回締約国会議に関する認識をもって、より環境に優しい未来のために化石燃料の使用方法を変えることに合意する必要性についてディスカッション・トピックを関連付けて考えることができるようになった。終盤は、次回に備えて前回の議論で提案された行動リストをまとめあげた。

グループ・ディスカッション VI

ねらい

将来の取組に向けた行動計画案を固めることがねらいとなる。

活動

a.「メモ書き」: お互いのやる気を引き出すために、簡単なメモ書きを互いに渡す。
b. 費用対効果の図を用いて、提案されたアクションをランク付けする。
c. 国別に行動計画を固める。

成果

行動計画に向けたグループのコミットメントを一つにするための話し合いは難しく、モチベーションに影響を与え得ることを学び、確立された関係性は、グループが強い目標や取組を達成するうえで強い動機付けとなると理解した。また、提案された全ての行動計画を費用対効果の図を用いて評価してみて、計画によって利害関係者、実行可能性、影響度合いが異なるため、全ての行動計画が簡単に実行できるわけではないことが分かった。一つの大きな行動計画を固めるのではなく、個々の計画も重要であるという考えがグループでまとまり、自分たちの計画が自国の文化的行動や社会経済的関心とのバランスを取る必要があることを理解した。費用対効果の図に照らして、PYは、SMARTメソッドを用いて知識を活用し、実行可能な行動計画を選定して詳細を詰めるに至った。

成果発表準備

ねらい

成果発表の準備に集中する。

活動

a. 成果発表の形態について簡単に確認する。
b. 役割分担: (1) 発表者、(2) スライド作成
c. 制限時間内で収まるよう発表練習を行う。
d.「サンキュー」活動

成果

成果発表会の形態について周知された後、PYは順調にグループ分けを行い、内容の準備、スライドの下書き、推敲に集中し、各発表者はリハーサルを行った。紆余曲折を経たが、プレゼンテーション・スライドを完成させて管理部のGoogleドライブにアップロードすることができた。最後は、DG4の歓声と、事業を通してのお互いの努力と参加への感謝で締めくくられた。

D. 成果発表会

テーマのトピック、ハッシュタグ「#DG4U」「#DoGreen4Us」、ディスカッション・グループのメンバーが紹介され、テーマ自体はSDGs目標7、12、13に関連するものの、時間の都合上、「再生可能エネルギー」と「循環型社会」に絞って発表がなされた。ハチドリソーラー株式会社／株式会社ボーダレス・ジャパンへの課題別視察で学んだ再生可能エネルギーの効率化についてデモンストレーションを行い、PYは、未来のエネルギーを代替グリーンエネルギーで賄うことが、世界的に二酸化炭素排出量と化石燃料の使用を削減しながら持続可能性を保つための鍵であると訴えた。また、リサイクルに関する議論から学んだことも発表された。消費に対して責任を持つことが、リサイクルに向けた個人の努力においては肝要であり、適切な教育及び社会的・文化的な慣習の変化によってそれが促進され得る。

E. 今後の活動計画

エネルギー、気候変動、リサイクルに関して我々が直面した問題は、国境を越えるものであったため、状況に特定されない立案がなされ、行動計画は国別になっている。PYによる行動計画は以下の通り。

ブルネイ: (1) リサイクルに関しての教育ー"Repurpose Project week"、(2) 断捨離 (ガレージ・セール)、(3) 地元の非政府組織との協力や、より環境に優しい未来を意識することを目的とした学校訪問

カンボジア: (1) 学校でリサイクル・クラブを設立する、(2) ソーシャルメディア上で環境に関するコンテンツを作成する。

インドネシア: "Save your plate" ー意識向上と報奨金プログラムを通じて、家庭での食品廃棄を減らすことを目的としたソーシャルメディア・キャンペーン

日本: グリーン政策について関係当局に対する働きかけを行う。

ラオス: 講演者 (青年／エンターテイメント) を招き、リサイクルに関する知識を共有する。

マレーシア: 農村地域に働きかけ、再生可能エネルギー利用の利点を説明することで、再生可能エネルギーの啓蒙キャンペーンを行う。

フィリピン: (1) 科学コミュニケーションと気候変動に関して学生を対象とした啓蒙活動、(2) 農村部におけるリサイクル実践の基礎作り

シンガポール: (1) 大規模なリサイクルプロジェクト、(2) 学校でのインセンティブ付きリサイクルプログラム

タイ: 例えば、プラスチックフリーの1月、#AsGreenAsYouCan 小さなプロジェクトから始めよう、など、毎月テーマを決めたオンラインキャンペーン

ベトナム: (1) 公開ワークショップを開催し、リユース品の使用を人々に奨励する、(2) リサイクル品の収集について地域社会に啓蒙する、(3) リユース品を必要としている人々に寄付する。

F. PYの声

PYが得るもの、学びが多いと感じた上位3つのセッションは、「グループ・ディスカッションⅡ　ディスカッション・トピックに関する問題や課題の一覧化」「グループ・ディスカッションⅢ　エネルギーについて」「成果発表準備」であったことがディスカッション・プログラム終了後に実施したアンケート調査より分かった。

事前課題は特に専門用語に馴染みのないPYにとって、

特に有益であったことが証明された。またPYたちは持続可能なエネルギーの様々な側面について気づきや、ディスカッションをする上で助けとなる現在の状況に関するデータや知識も得られた。

a. 日本と他国の違いについて学ぶことができた。プログラム参加前は、自国のエネルギー状況についてしか考えていなかったが、ディスカッションの中で自分の意見を共有した際に、他国が抱えている問題や課題が自国と異なっていることに驚いた。
b. 幅広く多様なテーマよりも、一つのテーマに絞ってディスカッションを行う方が望ましいだろう。
c. 気候変動に対応するために、再生可能エネルギーを使用することの重要性を学んだ。
d. 私はこれまで他の国へ行ったことがなかったので、異なった意見を持つPYとディスカッションを通して同じ時を過ごせて良かった。

G. ファシリテーター所感

「エネルギー、気候変動対策、循環型社会」というテーマでディスカッション・ファシリテーターを任せていただいた内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様に心から感謝の意を表したい。このテーマは、私の専門的背景と専門知識に深く関係するものであり、私はこの機会を通じて、エネルギー産業から得た最近の知見をPYに伝え、持続可能な実践について、特に日本及び東南アジア地域の課題に焦点を当てながら、PYと議論を交わすことができた。問題解決のための手立てをPYと共有できたことは実り多い経験であり、この若きリーダーたちがそれから大きな恩恵を受けることになるであろうと確信している。幅広いテーマであり、当初は居心地の悪さを感じていたPYもいたものの、それにもかかわらず、グループの姿勢によって芽吹いた実り多い学習環境下で、精力的に集中していく、目を見張るような力を見せてくれた。 グループ内での動き方は素晴らしく、全てのPYの交流は注目に値するものであった。ディスカッションのプログラムは短いものであったが、質の高いPYたちの積極的な参加により、その掲げていた目的は達成された。当初の狙い通りPYに能力が身に付いたこと、また、事業終了までにPYが身に付けた意識や知識の水準に対しても、私は満足している。にっぽん丸やふじ丸への乗船はなかったものの、PYたちは絆で結び付いた本事業の立派な精神を見せてくれた。このような素晴らしい経験と心に残る思い出を与えていただいた本事業に御礼申し上げたい。

Ms. Ireni Sufinah Ali Rahman

(5) 健康とウェルビーインググループ

ファシリテーター：Mr. James Seow
PY：22名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年（PY）は、青年の身体的、精神的、社会的健康、そしてウェルビーイングの定義及びその達成方法について話し合う。特に、コロナ禍における孤独や精神疾患といった問題の解決に、青年がどのように貢献できるかについて話し合う。

b. 期待される成果

- 日本及び東南アジアにおける、様々な立場の人々の健康とウェルビーイングの現状について理解する。
- 健康とウェルビーイングを促進するための介入策、政策、プログラムを知る。
- 国境を越えた資源の共有と協力が、いかに地域のウェルビーイングを促進するか知る。

c. 身につく能力

知識

- 健康とウェルビーイングのPERMA+4モデルを理解する。これは身体的、精神的、感情的ウェルビーイングに関係する。
- 健康とウェルビーイングが、文化、伝統、家族の習慣、地域社会とのつながり、信念、スピリチュアリティとどのように関係しているかを理解する。
- 新型コロナウイルス感染症が精神衛生、孤独、地域社会とのつながり、長期的な健康問題に与える影響を理解する。

スキル

- 異文化コミュニケーション
- 戦略的思考
- 口頭での発表及びスピーチ
- プロジェクト・マネジメント
- 異文化リーダーシップ及び協力

行動

- 自己認識
- 共感、尊重、思いやりのあるコミュニケーション
- 前向きな社会変革のための、多様な文化を超えたコラボレーション
- 好奇心及び生涯学習

B. 事前課題

課題 1

a. ポッドキャストを聴く「幸福の科学を発明した男：マーティ・セリグマン｜ザ・ハピネス・ラボ｜ローリー・サントス博士」
b. 文献を読む「セリグマンのPERMA+モデルの説明：ウェルビーイングの理論」
c. 文献を読む「生きがいの哲学：目的を見つけるための3つの例」
d. オーストラリアの国家ウェルビーイングフレームワーク「Measuring What Matters」を読む。フレームワークの50の指標の中に、PYの母国に関連するものがあるかどうか、またどのように関連するかについて考える。
e. 文献を読む：「グローバル・ゴール：良好な健康とウェルビーイング」

課題 2

文献を読み、その他の事前課題を終えた後、PYたちは以下の質問に回答し、自らの考察を書いた。

a. 健康で幸せで有意義な人生とは。
b. 人々が健康で幸せで有意義な人生を送ることを妨げるものは何か。
c. PY自身の経験に即した概念に照らして、健康とウェルビーイングを構成する各要素について比較する。これらの要素は、自身のウェルビーイングにとって重要か。それらは自らの文化や国に関係するものだろうか。それらで完成していると呼べるだろうか、これらの概念に欠けている他の要素は何か。

課題 3

参加国ごとにPYは研究グループを形成し、各グループは、自国の若者の身体的、精神的、社会的健康問題のうち、最も重要もしくは喫緊で、現在起こっているものを一つ取り上げ、また、自国で現在うまくいっている健康やウェルビーイングに関して強い領域を一つ取り上げた。これら二つのトピックのうち少なくとも一つは、新型コロナウイルス感染症が青年のウェルビーイングに与える影響についての議論に繋がるものであった。

各グループは、これら二つのトピックを５分間のパワーポイント・プレゼンテーションとレポートにまとめ、レポートには、ウェブサイトやオンライン資料（文献、動画、ポッドキャスト）へのリンクが含まれており、そのため読んだ者が、選択したトピックに関する背景情報や現在の実践、政策、プログラムについて知ることができるようになっていた。

C. 活動内容

課題別視察

施設：株式会社 タニタ

活動

a. 「タニタ健康プログラム」のプレゼンテーションで、従業員の福利厚生への取り組みと、従業員の健康、栄養摂取、身体活動をモニターする技術の活用について聞く。
b. 製品イノベーションの歴史を理解し、デジタル技術が従業員の健康的な生活をどのようにサポートできるかを実際にツアーで見学する。
c. 従業員の身体的健康と体組成を同社が測定する技術のデモンストレーションに参加する。
d. 従業員との対話を通じて、健全なワーク・ライフ・バランスを維持するための経験を理解する。
e. 同社が従業員のために用意する栄養バランスの取れた食事を体験する。

視察から学んだこと

a. テクノロジーは、従業員がより健康的な生活を送り、ワーク・ライフ・バランスをうまく管理できるよう、雇用主をサポートすることができる。例えば、歩数計を従業員の入退室パスに組み込む、従業員の活動・食事記録アプリを導入する、などである。
b. 職場のウェルビーイングを成功するには、上級管理職の支援とコミットメントが必要である。組織全体の強固な行動計画があれば、より効果的となる。
c. 従業員間のオープンな会話やキャンペーンを通じて職場におけるメンタルヘルスは推し進められるものであり、その結果、個人の課題や経験を正常化することに繋がる。

グループ・ディスカッション I

ねらい

a. 協力的で前向きな学習環境を築き、それに資する行動を学ぶ。
b. 異なる文化、学習能力、ワークスタイルの人々と働く方法を理解する。
c. 健康と福祉に関する様々なモデルと見方を理解する。

活動

a. オンラインでのアイスブレーキング
b. ウェルビーイングの実践：精神と感情の集中
c. PYの自己紹介及びグループでの決め事
d. グループ・ディスカッションにおけるトピックを概観する。
e. ウェルビーイングのPERMA+4とikigaiモデル、そして「Measuring What Matters」のフレームワークについて振り返る。欠けている要素や、ウェルビーイング

の他のモデルや視点を見つける。

f. PY個人の生活と自国で見聞きしたものに基づいてウェルビーイングについての考察を共有する。

g. 各自で振り返り、まとめを書く。

成果

PYは、誰もがサポートされていると感じられるような、安全で積極的な学習環境で起こる行動について理解した。また、ウェルビーイングの概念につき個人的、文化的経験との相違点を学んだ。

グループ・ディスカッション II

ねらい

a. 健康とウェルビーイングについての日本及び東南アジアにおける現況を知る。

b. アジアにおける健康とウェルビーイングに関する政策やプログラムの長所、短所、格差について知る。

c. 新型コロナウイルス感染症が精神的健康、孤独、地域社会とのつながり、長期的な身体的健康に与える影響を理解する。

活動

a. 各グループによるパワーポイント発表

b. グループに分かれて、各国の健康とウェルビーイングに関する課題と成功事例について考える。各国の優先事項の類似点と相違点を考える。

c. グループとしての総意を得る。各自で振り返り、まとめを書く。

成果

全参加国における健康とウェルビーイングに関する政策、プログラム、課題、成功した介入策について理解を深め、また、様々な国に共通する優先事項について検討した。

グループ・ディスカッション III

ねらい

a. 個人及びグループでのコミュニケーション・スキルを学ぶ。

b. ブレインストーミングによる分析、問題解決、アイデア構築のスキルを学ぶ。

活動

a. チームビルディング：高い塔をつくる競争

b. 各グループから発表されたトピックについて検討する。日本及び東南アジアにおける身体的、精神的、社会的健康問題と進歩の妨げとなっているものは何か。

c. PYがアジアで達成したい健康とウェルビーイングの目標を決める。

d. 課題、リソース、ネットワーク、共通するテーマを見出す。

e. グループに分かれて、以下のトピックにつき一から検討する。ウェルビーイングの直面する課題及びワーク・ライフ・バランス、新型コロナウイルス感染症が青年のメンタルヘルスに与える影響、大気汚染が身体の健康に与える影響。

f. 各自で振り返り、まとめを書く。

成果

各国から示された健康とウェルビーイングに関する主要なトピックを見定めた。集団での意思決定について学んで、三つの班のトピックを選ぶにあたって合意することができた。国を越えた協力を行うことを念頭に、グループとして取り組むに値する選定されたトピックについて深掘りした。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

a. アジアの健康とウェルビーイングを改善するために、経験、スキル、資金、人材など、どのような資源が必要かを理解する。

b. コラボレーション、パートナーシップ、協力のスキルや原則を学ぶ。

c. 交渉や人前で話すスキルを学ぶ。

活動

a. 課題別視察を振り返り、株式会社タニタの職場におけるウェルビーイングに関した施策から得た学びを、グループ別のディスカッションや行動計画に反映させる。

b. 各グループは、問題点、アイデア、解決策を全体に向けて提示し、議論及びフィードバックを求める。

c. 異なるグループ間でビジョンマップを回覧：各トピックについて、異なる国の間で協力と健康の公平性を促進するにあたってどのようにアイデアや資源を共有できるかについて知識を分かち合う。

d. 日本及び東南アジアにおける健康とウェルビーイングの問題を解決するためのアイデアと創造性を引き出す。

e. グループとしての総意を得る。各自で振り返り、まとめを書く。

成果

ウェルビーイングの直面する課題及びワーク・ライフ・バランス、新型コロナウイルス感染症が青年のメンタルヘルスに与える影響、大気汚染が身体の健康に与える影響といった、各トピックに関連する問題について班に分かれて深掘りした。健康に関するトピックを詳しく取り上げるにあたって、異なる視点を持ちながらも協力し、交渉し、アイデアや生活経験を共有することができるようになった。PYはまた、固定マインドセットと成長マインドセット（キャロル・ドウェック氏の研究に言及）、心的外傷後の成長、多くのアジア文化における精神的健康問題を議論することへの偏見、個人のリーダーシップにおける脆弱性を表現することの価値（ブレーン・ブラウン氏の研究に言及）についても議論した。

グループ・ディスカッション V

ねらい

a. 行動計画の策定
b. アイデアを検証し、実用性と実現可能性を確かめる。
c. コミュニケーション、スピーキング、ライティングのスキルを向上させる。
d. グループ・リーダーシップのスキルを身につける。

活動

a. PYは、インポスター症候群、リーダーにとっての適応的課題と技術的課題の違い、フロー（ミハリ・チクセントミハイ氏の研究を参照）の経験について話し合った。
b. 文化的盲点や特権を理解するための自己評価に、ADDRESSINGフレームワーク（パメラ・ヘイズの著作を参照）を使用する。
c. グループに分かれてビジョンマップの行動計画を共同で作成し、全体で行動計画を共有後、フィードバックを受ける。
d. 成果発表会での発表内容の焦点を絞る。

成果

成果発表会で発表する二つのテーマとして、ウェルビーイングに対する課題とワーク・ライフ・バランス、コロナ禍が青年のメンタルヘルスに与える影響に焦点が当てられることが決定した。PYは、個人とグループのリーダーシップの違い、また双方に必要なスキルを学んだ。また、力や特権、文化的盲点が、自らの世界観やコミュニティ・リーダーシップへの処し方に対してどのような影響を与えるかを学んだ。

グループ・ディスカッション VI

ねらい

a. 人前で話す能力、思考力、プロジェクト管理能力を養う。
b. 国際的に物事を進めていく際の原理原則を理解する。
c. コミュニケーション、スピーキング、ライティングのスキルを向上させる。

活動

a. ウェルビーイングの実践：サウンドスケープ・ウォーク
b. 最終的な行動計画を発表し、グループからのフィードバックとコメントを得る。
c. 最後の発表に向けて、学んだことや洞察、収穫や考察をまとめる。
d. 各自で振り返り、まとめを書く。学びの道しるべ。

成果

PYは、異文化間におけるリーダーシップと協力のスキルを学んだ。成果発表会の準備において、異なる文化的背景の中で健康問題を取り扱う際にはマクロとミクロの視点を持つこと、また、行動計画を立てる際にはアイデアに即して、想定されるリスクを取ることについても学んだ。

成果発表準備

ねらい

a. グループ・リーダーシップ、アイデアの発想、プロジェクト・マネジメント、リサーチ、プレゼンテーションのスキルを身に付ける。
b. 人前で話すことに自信をつける。

活動

a. アイデア、リサーチ、行動計画を首尾一貫したプレゼンテーションにまとめる。
b. 成果発表会に向けたパワーポイント・プレゼンテーションを準備する。
c. 発表するPYは最後のリハーサルを行う。

成果

PYは、異なる文化や背景を越えて協力し、集団で成果を上げることを学び、リサーチ、スピーチ、プレゼンテーションのスキルを身に付けた。

D. 成果発表会

心身の健康、ワーク・ライフ・バランス、社会的孤立、地域社会とのつながり、トラウマとなる出来事、職場での方針、新型コロナウイルス感染症が相互にどう作用しあうかに関して判明した内容が発表された。グループで身体的、精神的な健康問題を調べた際には、個人的、文化的、心理社会的、社会経済的なアプローチが採用され、また日本及び東南アジアの異なる国々における青年のウェルビーイングに対して特別な焦点が当てられた。社会的な偏見や仲間からのプレッシャー、精神疾患に対する誤解が、地域社会のメンタルヘルスに対する理解や、このテーマについてオープンな会話をする意欲に対していかに影響を与えるかをグループで認識するに至った。テクノロジーとソーシャルメディアは健康リスクを軽減し、コミュニケーションを促進することができるものの、それらが人々の生活を圧迫し、感情面でのウェルビーイングに影響を与えてしまうことがないよう注意が払われなければならない。

E. 今後の活動計画

a. プロジェクト・クリエイティブ・レジリエンス：アートを通じた癒しを提供する。青年たちが自己を表現し、コミュニティで有意義な関係を築くための安全な空間作り。メンタルヘルス教育は、ピア・ネットワークやサポート、アート展、ワークショップ、オンラインでの活動などを通じて行うことができる。ダンス、音楽、詩、工芸など、様々な芸術表現活動を提供することができる。既存のマレーシアでの事例が参考になり得る。
b. 職場のウェルビーイングに向けた取組：職場における総合的なウェルビーイングの評価と監修を始める。PERMA（ポジティブな感情、エンゲージメント、人

間関係、意義、達成）モデルを取り入れた組織全体の方針とプログラムを策定し、従業員が個人の生活と仕事の双方において充実した生活を送ることの背中を押す。健康的なライフスタイルを同僚に広めるべく、職場におけるウェルビーイングの推進役を誰かに依頼するか、自らがボランティアとして行う。

F. PYの声

a. 瞑想やサウンドスケープ・ウォークなどのウェルビーイング・プラクティスは、自らの軸を保ち、ぶれないようにするうえで役立つ。また、予定が詰まっているような大変な日には、元気を取り戻す方法として優れている。

b. 国別で行ったプレゼンテーションとレポートは、グループ・ディスカッションで各国にとって重要な健康とウェルビーイングの問題を示すうえで、効率的で体系立った手法であった。全ての参加国に対して平等に、健康に関するトピックを取り上げる機会を与えることで、全PYが日本及び東南アジアにおける幅広いテーマと具体的な懸念事項について概観し、的を絞って理解することができた。

c. PYの中でも幾人かは、どのような健康トピックについて調べて成果発表会で発表したいかを、グループの総意で決める機会が与えられたことを評価した。決定はファシリテーターが勝手にしたのではなく、口数が少なく自信無さげなPYも含め、全員がディスカッションに貢献するよう促されたことが良かったという。

d. また、PYはディスカッションにおいて個人のリーダーシップ要素を発揮していた。プレゼンテーションを伝えるのと同じくらい、グループ内のつながりと学びの過程が重要であることを周知させるため、各回の始めに、グループにおいて全員の様子や進捗などを確認することに十分な時間が割り当てられていた。グループの話し合いに耳を傾ける際、自分の意見を正直に伝え、偏見を持たないよう推奨され、また、異なる意見や馴染みのない意見に対して好奇心を持つことも喚起された。

G. ファシリテーター所感

グループ・ディスカッションのファシリテーターを務めるのはとても楽しく、PYの積極的なエネルギーとやり遂げる姿勢には目を見張るものがあった。今年度の事業は期間が短かかったため、特に予定が詰まっており大変だったが、PYたちは、楽観的で、お互いを尊重し、励まし合い、多くの支援を互いに受けながら、挑戦していた。私は、グループが良好な関係と信頼を築けるよう、可能な限り多くの空間と時間を確保することに努めた。

私としては、PYが日本及び東南アジアにおける健康とウェルビーイングの問題について学ぶのみならず、個人的な信念、態度、視点、思い込みについて自己認識を深めることができるよう、非常に注意深く配慮することを心がけてきた。ディスカッションの内容も重要だが、私はこのグループに対して、自分自身について学んでもらい、異文化理解を深め、異なる立場の人々と効果的に働くにはどうしたらいいかを学んでほしかった。自分たちが奉仕しているコミュニティにおける自分たちの力、特権、主体性、文化的盲点を発見することは、PYのためになった。

このグループは、知恵を自らの中から見つけ出すことができて感心した。答えを与えたり、ある状況においてどのような決断や行動が望ましいかを指示したりするのではなく、私はグループに考えさせ、どのような行動をとれば最も自らのためになるかを探るよう、そして同時並行的に思考し、自分にとって馴染みのない物の見方についても熟慮するよう発破をかけた。こうしたことから、既成概念にとらわれず考えるようになり、グループ別でのディスカッションやグループ・プレゼンテーションにおいて創造性や革新性を刺激する一助とすることができた。

ポジティブ心理学とウェルビーイング科学の理論と実践をディスカッションとアクティビティに組み込んだことに、最後は言及したい。本事業終了後に読むことのできる資料を数多く提供した。青年たちが生き生きと活躍するためには、個人のウェルビーイングの追求の一環として、こうした実践を続けていくことをおすすめする。

Mr. James Seow